

ワークショップ「認識論理および信念論理の最前線」事前資料

長田怜*

本発表の目的

マイケル・ダメットはかつて、“What Is a Theory of Meaning? (II)”において、真理概念にまつわる一般的要請として可知性原理 (knowability principle) を掲げた。この原理は、真理という概念と知識という概念を単刀直入に結びつけるものであり、これら概念の哲学的解明にとって、非常に重大な意義をもっている。現在でもこれに関して、实在論陣営と反实在論陣営との間で活発な議論が展開されている。なかでも、この原理にまつわる困難とされる「フィッチのパラドクス」が解消可能なのか否かを、認識論理によるパラドクスの定式化を通じて争う、という形での議論が盛んに行なわれている。しかし、こうした状況下で、可知性原理についてのダメット自身の議論の意図と内容がきちんと把握されているとはいえない。本発表では、そうしたダメットの議論が何を示そうとしているのかを吟味し、その上で、その議論が認識論理やフィッチのパラドクスに対してどのようなインパクトをもつのかを検討する。

本発表の概要

ダメットの提示する可知性原理とは、次のような内容をもつ原理である。

ある言明が真であるならば、その言明が真であることを原理的に知ることができなければならない

この原理は、真理概念に一般的に要請される事柄を明示化している。つまり、言明の真理が何であるかについて解明がなされている場合には必ず、この原理がきちんと守られているはずだ、ということである。ダメットがこうした要請を課す際、念頭に置かれているのは、真理に関する实在論を批判することである。ダメットによれば、真理に関して实在論的な立場をとると、その真理が決定不可能な言明については、当原理の後件、すなわち、その真理を原理的に知りうる、という部分が説明できなくなってしまうのである。本発表の前半部ではまず、この点に関するダメットの議論のポイントを的確に捉えることを目標とする。

さて、もし实在論者がこのようなダメットの議論に反対したいのであれば、ダメットの言うことに反して、实在論でも可知性原理を説明することができる、と論じるか、そもそもこの原理そのものが不当な要請だ、ということを示すか、少なくともいずれかのことを行なう必要がある。そうした動機をもつ人にとっては、フィッチのパラドクスと呼ばれる困難は、このうちの後者の点を示す、ひとつの手がかりとなる。というのも、フィッチのパラドクスによれば、可知性原理を認めてしまうと、次の明らかに不合理な帰結

ある言明が真であるならば、その言明が真であることは知られている

が得られてしまうからである。そのため、フィッチのパラドクスが解消可能か否か、という点が、实在論者と反实在論者との間での係争点のひとつとなっている。とりわけその論争は、本ワークショップのテーマとなっている認識論理を用いてこのパラドクスを定式化する、というスタイルのもとで行なわれることが多い。本発表の後半部では、こうした手法による可知性原理の批判が真に妥当なものなのかどうかを問う。それにより、可知性原理をめぐるダメットの議論がもつ真意がより明らかになるであろう。

*東京大学人文社会系研究科博士課程